

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 12 月 20 日	
所属部局・職	アジア・アフリカ地域研究研究科（5 年一貫制）博士課程学生
氏 名	大塚亮真
1. 派遣国・場所（〇〇国、〇〇地域）	
ウガンダ共和国 ブウィンディ原生国立公園	
2. 研究課題名（〇〇の調査、および〇〇での実験）	
ブウィンディ原生国立公園におけるマウンテンゴリラの保全活動と地域住民の関係性について	
3. 派遣期間（本邦出発から帰国まで）	
平成 28 年 9 月 5 日 ～ 平成 28 年 12 月 5 日（91 日間）	
4. 主な受入機関及び受入研究者（〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士／〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏）	
Conservation Through Public Health(CTPH)/Uganda Wildlife Authority(UWA)	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）	
<p>2016 年 9 月 5 日から 12 月 5 日かけて、私はウガンダ共和国のブウィンディ原生国立公園にてフィールド調査を行った。修士過程の研究のための予備調査と Conservation Through Public Health (CTPH)のボランティアスタッフとして貢献することが今回の渡航の目的であった。</p> <p>【日程】                  2016/9/5 京都市内関西国際空港→ドバイ空港                  2016/9/6 ドバイ空港→エンテベ空港→カンパラ                  2016/9/7-2016/9/9 カンパラにて調査準備                  2016/9/10-2016/11/30 ブウィンディ原生国立公園にて予備調査                  2016/12/1-2016/12/3 カンパラに戻り休息、UWA へ提出するレポート作成、CTPH のオフィスでプレゼン                  2016/12/4 エンテベ空港→ドバイ空港                  2016/12/5 ドバイ空港→関西国際空港→京都市内自宅</p> <p>【予備調査～地域住民への聞き取り～】                  ブウィンディのマウンテンゴリラはしばしば国立公園外に出てきて畑の作物を荒らすことが知られており、ゴリラたちは森の食物量の不足によってではなく、ゴリラにとって魅力的なバナナやユーカリを求めてコミュニティーに出てくる(Seiler,2015)ことがわかっている。ゴリラによる crop-raiding は Human-Wildlife Conflict のひとつで、住民たちにとっては深刻な問題である。エコ・ツーリズムで得た利益のいくらかを地域に還元するシステムはあるが、被害にあった作物に対する直接的な補償はない。ブウィンディのマウンテンゴリラの個体数は増加傾向にあり、また国立公園周辺の人口も急激に増加している。そのため今後 Human-Wildlife Conflict はさらに深刻化していく可能性がある。ゴリラによる作物被害を軽減し、かつ住民とゴリラとの危険な接触を回避するために、1998 年にはじめの HUGO(Human-Gorilla Conflict Resolution Team)が編成された。HUGO チームは国立公園に隣接した村の住民たち(2～6 人)によって構成され、各村に配置されている。公園外にゴリラが出てくると、出来るだけ安全な方法でゴリラを森に追い返す。HUGO メンバーはボランティアで活動しており、長靴、レインコート、ポショや豆などは Uganda Wildlife Authority(UWA)によって支給されるが、給料は支払われていない。HUGO が結成されてから今年で 18 年となるが、今までその活動の実態を深く調べた研究は少なく、HUGO の活動がどの程度ゴリラによる作物被害の軽減とゴリラの保全活動に効果的に機能しているのかは未だ十分に議論されていない。</p>	
<p>写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p>	



写真 1. 畑に出てきてバナナを食べるゴリラ



写真 2. ゴリラに食べられたユーカリ

Human-Gorilla Conflict の解決策のひとつとして HUGO の活動を捉え、詳細に調査・記録・検討することで、本研究を野生動物保全のためのケーススタディとしたいと考えた。

そこで今回の渡航では、HUGO の活動の実態を把握し、その有効性を評価するために HUGO メンバー43名と HUGO が配置されている村々の住民 51 名を対象に聞き取り調査を行った。さらにゴリラの作物被害に対する住民の認識についてもいくつか質問した。HUGO の活動の実態と彼らが直面している状況に迫ることで、ブウィンディ原生国立公園周辺の地域住民とゴリラとの関係性を考察することも目的のひとつとした。HUGO メンバー以外の回答者は、公園付近に畑住民の中からスノーボールサンプリング法によってランダムに選出された。訪れたのは MUKono, Bujengwe, Rubuguri という 3 つの Parish で、訪れた村は、Mukono, Nkwenda, Rubona, Iraaro, Nyamishamba, Mushorero, Kishegyere, Kazahi, Rushaga, Nyabaremura の 10 村である。(当初は HUGO の活動に同行し、直接観察をする予定だったが、いくつかの理由により今回は実現できなかった。)

聞き取り調査から、以下のようなことが明らかになった。

- ・インタビューした地域の HUGO メンバーはすべて男性で、平均年齢は 41 歳（最年少は 20 歳で最高齢は 62 歳）
- ・最も畑に多く出てくる野生動物はエンコベ（バブーン）で、その次にエンチマ（主にクロシロコロブス、さらにブルーモンキー、ロエストモンキーなど）、エンガジ（ゴリラ）は 3 番目というのが最も多い住民の意見であった。
- ・住民の認識によるとゴリラが畑に出てくる頻度は平均にしておよそ月に 2 回ほどだった。しかし、2 ヶ月に一度村の近くにゴリラが現れ、約一週間弱ほど滞在するという意見も多かった。季節性には違いは見られそうになかったが、年によってよく出てくる年とそうでない年があるという認識を持っている人もいた。
- ・HUGO は村の住民や UWA のトラッカーたちから連絡を受け、ゴリラが公園外に出てきたことを知り、メンバーを集めて出動しゴリラを森に追い返す。連絡は携帯電話が使われることもあれば、走って直接伝えに行ったり、丘の上から叫んだりする方法もある。追い返す方法は UWA が過去に主催したワークショップ内で学び、現在では主にパンガで自分たちの姿を見えやすくしてから一列にならび、棒で地面や草木を叩きながら追っていく。またこの時、声を出したり口笛を吹いたりすることもあれば、ただ黙ってゆっくり追っていくこともある。コミュニティーの奥までゴリラが来て、早急に森に追い返さなければいけない場合はコンテナをドラム代わりに使い、あるいはパンガと棒を叩き合わせてゴリラを追い返す。時には UWA のトラッカーたちと、あるいは他の住民たちとともに活動する。
- ・ブウィンディの南部地域ではゾウによる被害が比較的多く、ゴリラだけでなくゾウも追い返す働きをしている。今後バブーンを追い返す役割も HUGO が担うことになる可能性もある。
- ・ゴリラを追い返すのはボランティアとしての活動としてはかなりハードなもので、月給を求める声が少なくない。以前からどのように HUGO メンバーのモチベーションを維持するかが課題だと指摘されてきたが、UWA や NGO が開催するワークショップは効果的である。(多くの HUGO メンバーがワークショップ内で新しい知識を得ること、また他の HUGO メンバーと交流することを期待して

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

いと答えた。)

・ほぼ全員の回答者がゴリラに対して好感をいっており、ゴリラにバナナ畑を壊滅させられた経験を持つ人ですら、ゴリラが好きであると述べていた。理由の多くは、『地域に収入をもたらすから』、というものであったがそれ以外にも単純にゴリラを見るのが好きだからという意見もあった。

以上は聞き取り調査から得られた情報のうちの一部である。集めた情報をさらに整理・分析し、次回の渡航時には、今回成し得なかった直接観察かあるいはそれに代わる方法でデータを収集し本研究を深めていく予定である。またゴリラの遊動パターンや畑に出てくる頻度などの基礎的なデータも収集あるいは入手し、聞き取り調査や参与観察から得たデータと比較・検討したいと考えている。



写真 3. ゴリラが出て来るポイントのひとつ



写真 4. ゴリラが良く出てくる場所を教えてくださいという住民



写真 5. 集合写真 (Buhoma でひらかれた HUGO のワークショップにて)

【糞サンプルの採取(CTPHのボランティアとして)】

CTPHは月に一度、ブウィンディ原生国立公園のすべての人付け群から糞サンプルを採取し、健康モニタリングを継続しようと努めている。私は今回の滞在中、CTPHのボランティアスタッフとして計10回マウンテンゴリラの糞サンプルの採取を行った。訪れたグループはMubare, Rushegura, Habinyanja,そしてBikyngieの4群である。糞の採取をしたあとはトラックーたちとゴリラの行動を観察し、写真を撮ることが出来た。9月末に開かれたHUGOのトレーニングワークショップにも参加し、HUGOメンバーとも糞サンプルの採取を行った。採取したサンプルはNGOのラボテクニシヤンの指導のもと分析を行った。糞サンプル内に含まれる寄生虫の数をカウントして、EPG(Egg Per Gram)を算出するのが主な仕事であった(カウントにはMcMASTER法を用いた)。



写真 6. 霧が立ち込めるブウィンディの森



写真 7. 森の中



写真 8. ゴリラのベッド

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真 9. お母さんに寄りかかって眠るコドモ



写真 10. お母さんの背中に乗って移動



写真 11. ゴリラの糞サンプル採取中



写真 12. トラックーのみなさんと

写真（必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。  
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

今回のフィールド調査はPWSの協力により行うことが出来ました。カウンターパートとなっていたいただいた Conservation Through Public Health、そして調査を許可し支援して下さった Uganda Wildlife Authority と Uganda National Council of Science and Technology、さらに日本でご支援して下さったすべてのみなさまに心より感謝申し上げます。